

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	十重田 裕一
論文題目	横光利一における大正・昭和期メディアと文学の研究
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、論者がこれまで一貫して研究して来た大正末から戦後間もなくまで活躍した作家横光利一の営為を辿りつつ、それを広大な大正・昭和文学の世界の中でどう位置づけるか、メディアとの関係はどうであるのか、時代との関わりはどうであったのかをめぐって、詳細な跡づけと新たな問題提起を試みた労作である。とりわけ、メディアとの関係では、新時代の出版状況と映画などとの関わりに焦点を定めている。実証的なアプローチを基盤にしつつ、対象に即した分析の視点を選んでいる点、時代を鏡のように映し出す横光の特色を見定めた研究方法となっている。全体は、400字詰め原稿用紙換算で1100枚の達成であるが、既発表の論文をただ集めたのではなく、全体の論旨が明確になるよう取捨がなされており、「はじめに」「おわりに」を付し、全体の構成を考えた配慮がなされている。全体は第一部から第七部に分かれており、それらが有機的に連関している。</p> <p>「第一部 横光利一の言語観と「国語」政策 大正後期から昭和初期を中心に」は、全二章からなる。標準語の第一世代である横光がどういう言語観を持つようになったのかを分析し(第一章)、1920年前後の同時代的広がりの中で、書き言葉を話し言葉に近づけていこうとする改革運動と横光の文学活動の関係を論じている(第二章)。</p> <p>「第二部 大正期日本、外国文学の受容 習作期から新感覚派時代へ」は、全三章からなる。横光の青春時代は、多くの外国文学が翻訳・紹介された時期でもある。とりわけ横光との関係では、ドストエフスキーとストリンドベリの影響が重要であると、論者は指摘する。まず、横光が若き日に翻訳を試みたメレジコフスキー「ドストエフスキー論」の未発表草稿(神奈川近代文学館蔵)を分析し、横光の習作期の活動を明らかにする(第一章)。次に、横光がしばしば言及した外国文学であるドストエフスキーとストリンドベリの影響が、どう小説の方法に関わるかを跡づける(第二章)。さらに、横光が創作においてどう外国文学を典拠とし作品に生かしていったかを、新感覚派時代の典拠の求め方、その受容のあり方から解明している(第三章)。</p> <p>「第三部 変革期の出版ジャーナリズムと文学者 『文藝春秋』『改造』を中心に」は、全四章からなる。ここで分析される、横光が活躍する文学の変革期は、出版の市場性が顕著になった時期であり、論者は横光自身もある講演の中で文壇の市場性についての明確な認識を表明していたことに注目する。まず分析されるのが、横光とも関係の深い雑誌『文藝春秋』で、出発期の『文藝春秋』の重要性を指摘する論者は、どういう市場戦略がそこにあったかを分析する(第一章)。『文藝春秋』の跡づけは、さらに雑誌出発期の雑誌広告を文学との関わりで検討する展開を見せる(第二章)。横光文学の背景としての『文藝春秋』の跡づけは、少し遅れて創刊された『文藝時代』にも関係し、不思議な相関性を『文藝春秋』と『文藝時代』にもたらしめている(第三章)。また、出版ジャーナリズムとの関係で見落とせないのは、横光が深く関わった出版社である改造社と、雑誌『改造』の存在である。横光は『改造』に代表作を載せ、その文学活動と評価は、改造社の趨勢と軌を一にしているのである。そうした事実を丹念に辿りながら、横光と出版ジャーナリズムとの関係の分析を展開している(第四章)。</p> <p>「第四部 演劇・映画と文学との芸術交流 一九二〇 三〇年代日本における一側面」は、全五章からなる。横光と同時代の演劇・映画との強い結び付きに注目する論者は、文学・演劇・映画の相互交流を考える視点から、横光の創作にどう演劇・映画が影響しているかを分析する。まず、「春は馬車に乗つて」の小説表現が、どういう戯曲・演劇に対する関心から形成されたかを辿っている(第一章)。次に調べられているのは、横光が関わった新感覚派映画聯盟の内実である(第二章)。さらに、「新感覚派」の理念が、映画製作の体験から実質化されたことを資料から辿っていく(第三章)。そして、映画に触発された横光の実験的文体がどう形成されたのかを跡づける(第四章)。最</p>	

後に、問題作「機械」が、当時日本で上映されていた前衛映画の影響のもとに成立したことを論じている(第五章)。

「第五部 草稿から活字へ 本文とメディアをめぐる探求」は、全三章からなる。横光の作品草稿を見据えつつ、単なる創作のプロセスのみでなく、そこに介在する編集者・出版社・文壇などがどういう影響を与えているのかに視点を向ける。本文という存在を、言わば複合的に分析する試みなのである。まず、早稲田大学中央図書館所蔵の「花園の思想」原稿を発掘し、綿密な加筆修正の様を丁寧分析する(第一章)。次に、川内まごころ文学館所蔵の『改造』所載の「上海」の草稿群を分析し、重要な部分の追跡を行っている(第二章)。また、早稲田大学中央図書館所蔵「時間」の草稿を検討、創作のプロセスにいかに関与し、印刷工程の人々の力学が見られるのかを分析する(第三章)。本文の生成研究は現在盛んであるが、横光の資料を題材に、多くの問題を提起した点、高く評価される部分であろう。

「第六部 「文学の神様」の肖像 文芸復興期から渡欧前後」は、全二章からなる。横光は、マスメディアの中でどう言及され、作家像が形成されてきたのだろうか。まず、「文学の神様」という呼称の用例を丹念に収集、昭和10年前後の文芸復興期における作家像を辿る(第一章)。次に、マスメディアにおける横光の姿を、欧州紀行時の資料を通して分析する(第二章)。いずれも、横光をめぐる「神話作用」としての表象の意味付けとなっている。

「第七部 占領期の表現とメディア規制 第二次世界大戦後版小説の本文と検閲」は、全三章からなる。GHQ/SCAPの検閲の実体は、占領期のメディア規制の問題として、横光の文学にも大きな影響を与えている。横光の長編「旅愁」は、戦前から戦後にかけて執筆され刊行されたため、本文に多くの問題が潜んでいる。特に論者が明らかにしたのは、戦後版の「旅愁」の本文の諸問題である(第一章)。さらに、横光が自作をどう書き変えていったのかを辿り、検閲に対する横光の姿勢を分析した(第二章)。最後に、横光の遺作「微笑」に潜む問題、事後検閲の詳細が明らかされている(第三章)。

各部分の達成を紹介したが、横光利一という大正・昭和の文学者の営為をしっかりと見据えつつ、それを絶えず時代の生きた動きの中で意味づけようという姿勢は、興味深い。資料的な実証性は十分であり、視点の広がりも現代の横光研究から見て大いに示唆的である。惜しむらくは、メディアとしての新聞という存在への視点が弱いこと、初期新感覚派時代の作品の分析が少ないこと、「純粹小説論」などの主要評論についての分析がほしかったことなどが挙げられよう。論証の文体としてやや工夫が必要な部分が見られること、概念の明確さがさらにほしい部分が見られることなど、今後の論者の研究に期待される部分も見られた。しかし、横光研究、さらには大正から昭和にかけての文学を考えるにあたっての重要な視点をいくつも提出したことは明らかであり、本論文が、「博士(文学)」の学位を授与するのにふさわしい内容であることを認定する。

公開審査会開催日	2010年 9 月 24 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	中島 国彦
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		高橋 敏夫
審査委員	早稲田大学政治経済学術院・教授		宗像 和重
審査委員			
審査委員			